

縄文人の技を最新技術で解き明かす 古屋敷遺跡出土漆塗り豎櫛

古屋敷遺跡（大田市）調査年 2013～2015 年

増田浩太

考古学上の発見は、かならずしも「現場で見つかる」とは限りません。後の分析や調査によって、はじめて新事実が発見されることも案外多いのです。今回ご紹介する「逸品」もその一つでした。

今から7年前、静間仁摩道路（山陰道）の建設予定地を発掘していた私は、日々縄文土器と格闘していました。仁摩平野の一番奥に位置する古屋敷遺跡は、縄文時代後期から弥生時代はじめ頃の遺跡です。この遺跡の特徴は、なんといっても当時の生活の痕跡（遺構面）が何層も重なって残されていたことでしょう。次々に出土する大量の縄文土器や石器の写真を撮り、図面を書き、番号を付けて取り上げる。20センチ掘り下げるとまた大量の土器。毎日その繰り返しです。

そんなある日、土器の破片に混じって、ちょっと変わった塊があるのに気がつきました。それは長さ5センチ、幅3センチ、厚さが8ミリほどの破片で、表面だけでなく断面も真っ黒。明らかに縄文土器の破片ではありません。丁寧に土を落とすと、側面には5個の丸い孔が等間隔で並んでいます。これは縄文時代から弥生時代にかけて流行した「豎櫛」と呼ばれる髪留め的一种で、元々は穴の部分に歯のとなる細い棒が何本も差し込んであったはずですが。長年を経て歯が朽ち果ててしまい、束ねていた根元の部分だけが残っていたわけです。この部分は漆に木粉などを混ぜて丈夫に作られていたため、残っていたのでしょう。縄文時代の豎櫛は東北地方を中心に、主に東日本で出土し、島根県内ではほとんど例がありません。珍しい発見であることは間違いないのですが、赤色に彩色されたものが多い東日本の豎櫛に比べ、古屋敷遺跡の櫛は真っ黒で、少々地味なことは否めません。

そんなとき、同僚から豎櫛の製作方法を調査しているチームがあると聞かされました。X

線 CT 装置を使って、櫛の内部構造を調べることができるというのです。早速、装置のある奈良県の施設に櫛を持ち込み、撮影を行いました。病院で検査に使用する X 線 CT 撮影、あのドーナツみたいな機械を使う撮影と原理は同じです。0.35 ミリずつ位置をずらしながら、200 カットあまりの断面写真を撮りました。

次に写真データは青森県の弘前大学に送られました。この写真をパソコン上でつなぎ合わせ、立体的なモデルに復元するのです。数ヶ月後に得られた結果は、驚くべきものでした。櫛の内部にあった骨組みが、そのまま空洞となって綺麗に残っていたのです。歯の部分は片側二本ずつ、計四本の細い棒で挟んで固定されており、結束に使われた紐（の空洞）もハッキリと残されていました。紐の太さや撚り方、縛り方まで把握できたのです。撮影前には想像もできなかった、縄文人の『いい仕事』が、わずか5センチほどの黒い塊の中に残されていたのです。

(古代出雲歴史博物館専門学芸員)



出土した櫛



復元図

櫛の復元図



櫛の CT 画像

協力：片岡太郎（弘前大学北日本考古学研究センター）、村田泰輔・星野安治（奈良文化財研究所）